

幸道嘉太郎家住宅の建築調査報告

吉 田 純 一*・多 米 淑 人*・深 澤 翔**

The report of the Architectural investigation of the Kodo-house in Sabae city

YOSHIDA Junichi*, TAME Yoshihito*, FUKASAWA Sho**

This paper is the report of the architectural investigation of the Kodo-Kataro's house in Sabae city.

This house was built at from tenth to twelfth of the Showa. It is the excellent example as the historic town house and it has the important function for the street view of the Sabae city.

1. はじめに

本稿は鯖江市幸町1丁目4-3に所在する幸道嘉太郎家住宅の建築調査報告である。調査は、鯖江市より委託された福井工業大学建設工学科教授吉田純一の主導の下、同大学大学院生の多米淑人・深澤翔および学部生の高橋直樹（4年）・伊賀義晃（同）・吉田良（同）によって、平成19年11月22日に行われた。

2. 幸道家の概要

幸道家は戦前までは屋敷の北隣にある「幸道眼科」の敷地に工場を構え、繊維業を営んでいた。戦時中の昭和18年頃、建物や機械を軍に供出し、営業を止めたというが、当地における有力な資産家であったことは疑いない。また、現当主嘉太郎氏の父君は神明町町長を勤めており、幸道家は当地における名家でもある。

3. 屋敷構え

現在の住宅や屋敷地は、当家が繊維業で繁栄していた昭和10年から同12年にかけて建設、整備されたという。これを裏付ける確証は得られていないが、現当主が子供のころの話であり、これも信頼してよい。

屋敷地(図1)は、東西約21m、南北約33mのほぼ矩形で、南側と西側に道路が通る角地にある。

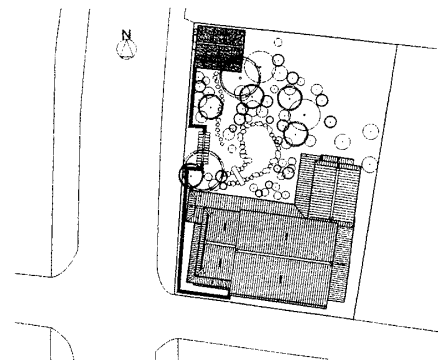


図1 幸道家配置図

* 建設工学科建築学専攻 ** 同大学院生

南側通りに沿って主屋を構え、南面西寄りから西側の通り沿いには背後の土蔵まで塀を巡らし、その中ほどに門を設けている。門の内側、ほぼ敷地の中央部には主屋やそれから西側と北側東端に張り出す別棟部および北の土蔵などに囲まれて庭がある。小振りながらもよく整備され、周りの建築とも調和している。

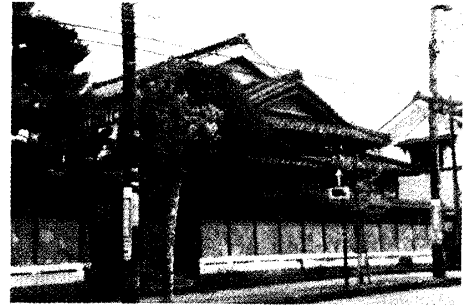


写真1 外観(西側)

4. 住宅の建築形式

(1) 外観

住宅は敷地の南端の通り沿いにたつ。主屋部は桁行6間1尺、梁間4間半、起り屋根の切妻造、棧瓦葺き、平入りの建築で、主屋部の西側に入母屋造、棧瓦葺で、やはり起りをもつ別棟部を張り出し、その北寄りにさらに一段低い入母屋造、棧瓦葺の突出部がある。つまり、当家长宅の西側外観(写真1)は、土塀の瓦屋根越しに二段構成の入母屋破風があり、その奥に主屋の大きな切妻屋根がみられるという複雑で、重厚な屋根構成が特徴的である。そしてこの外観は通りの景観の観点でも大きな役割を果たしている。

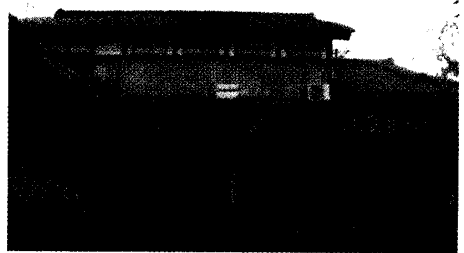


写真2 外観(北側)

さらに主屋背後の、東寄りにも入母屋造、棧瓦葺の別棟が北に張り出し、東側には約1間半幅の葺き下しの下屋がついている(写真2)。



写真3 外観(南東側)

南側の通り沿いにみられる表構え(写真3、4)は、まず、棧瓦葺の下屋庇で上下階を区分している。一階部はほぼ中央に間口2間の玄関をとり、両側半間を袖壁とし、中央1間に引き分けの格子戸を立てる。玄関の左側には2間幅、右側には1間幅の出格子を付ける。

下屋庇上の二階は、壁面を黒漆喰の大壁塗とし、軒裏も黒漆喰壁で塗籠め、3間通しの窓枠は漆喰壁を一段高く盛り上げて強調されている。

前面の敷石は越前の古家では笏谷石敷きとするのが一般的であるが、当家の敷石や葛石、基礎石などはすべて花崗岩が用いられている。この花崗岩の白色と黒ずんだ木部や黒の漆喰壁との色合いもよく調和し、当家の表構えをより一層際立たせている。

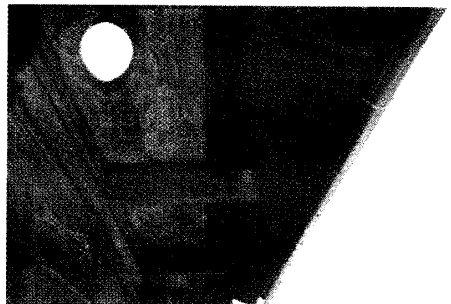


写真4 正面下屋

(2) 平面(図 2)

主屋部東端の1間半を含む東側下屋部分は勝手や炊事場、浴室、便所など日常生活の中心となる場で、この一面は現代生活に合わせて改装されている。

これより4尺幅の廊下を挟んで西側に続く4間部分には表側に8畳大のゲンカン(写真5)、その奥に10畳のイマ(写真6)があり、これらの上手に8畳のヘヤ(部屋)と10畳のヒカエノマ(控間)がある。玄関を含めれば、主屋部の一階は田の字型の4室構成になる。

ところが、ヘヤとヒカエノマのさらに西側の表に8畳のブツマ(写真7)、裏に10畳のオクザシキ(写真8)が続いている。この2室は上述した主屋の西に張り出す別棟部に含まれている。さらオクザシキの北西隅は上便所が設けられている。この部分はさらに一段低く張り出す入母屋の別棟部にあたる。

一方、主屋の東寄りから北に張り出す別棟部は離れ座敷で、8畳のハナレザシキ(写真9)と6畳のハナレノイマの続き座敷になっている。そして西側のオクザシキからヒカエノマ、イマそして離れ座敷には庭に沿ってL型に幅4尺の縁が巡っている。この縁板は幅が約3尺の樺材である。庭側に半間の土庇もついている。

ハナレザシキの天井(写真10)は周囲を緩やかに折り上げた網代天井になっている。この意匠などから建築年代は主屋部よりやや下がることも考えられる。ただし、西側に張り出す別棟部はブツマやオクザシキと主屋部のイマやヒカエノマなどの構成は一体であり、上便所を含む西側の張り出し部は主屋と同時期に建設されたことは疑いない。



写真5 ゲンカン



写真6 イマ



写真7 ブツマ



写真8 オクザシキ

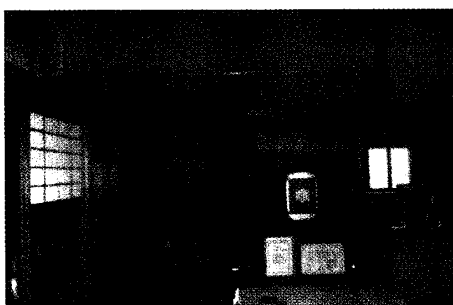


写真9 ハナレザシキ

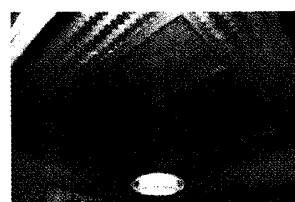


写真10 同天井

ブツマやオクザシキを含む西側の諸部屋はほぼ創建当初のままとみられる。まず、ゲンカン内部は秋田産と伝わる樺の太い柱や装束がみられ、天井の二階床梁や正面と左側にたつ帯戸なども樺材で、赤っばい吹き漆塗である。

また、上がり縁やそこから奥へ通じる4尺の廊下、さらに北側の庭沿いL型の縁などの床板もすべて樺材である。上手10畳のオクザシキは1間半幅のトコと天袋付きの違棚、付書院の座敷飾を備え、その南に続くブツマや下手のヒカエノマやイマなどもすべて棹縁天井で、内法長押を回し、室境には繊細な彫刻欄間がはめ込まれ、いずれの部屋も整った室内意匠がみられる。

なお、桁行が6間4尺とはやや半端な規模になるのは、勝手部と座敷部を隔てる廊下を4尺幅にとっているためである。

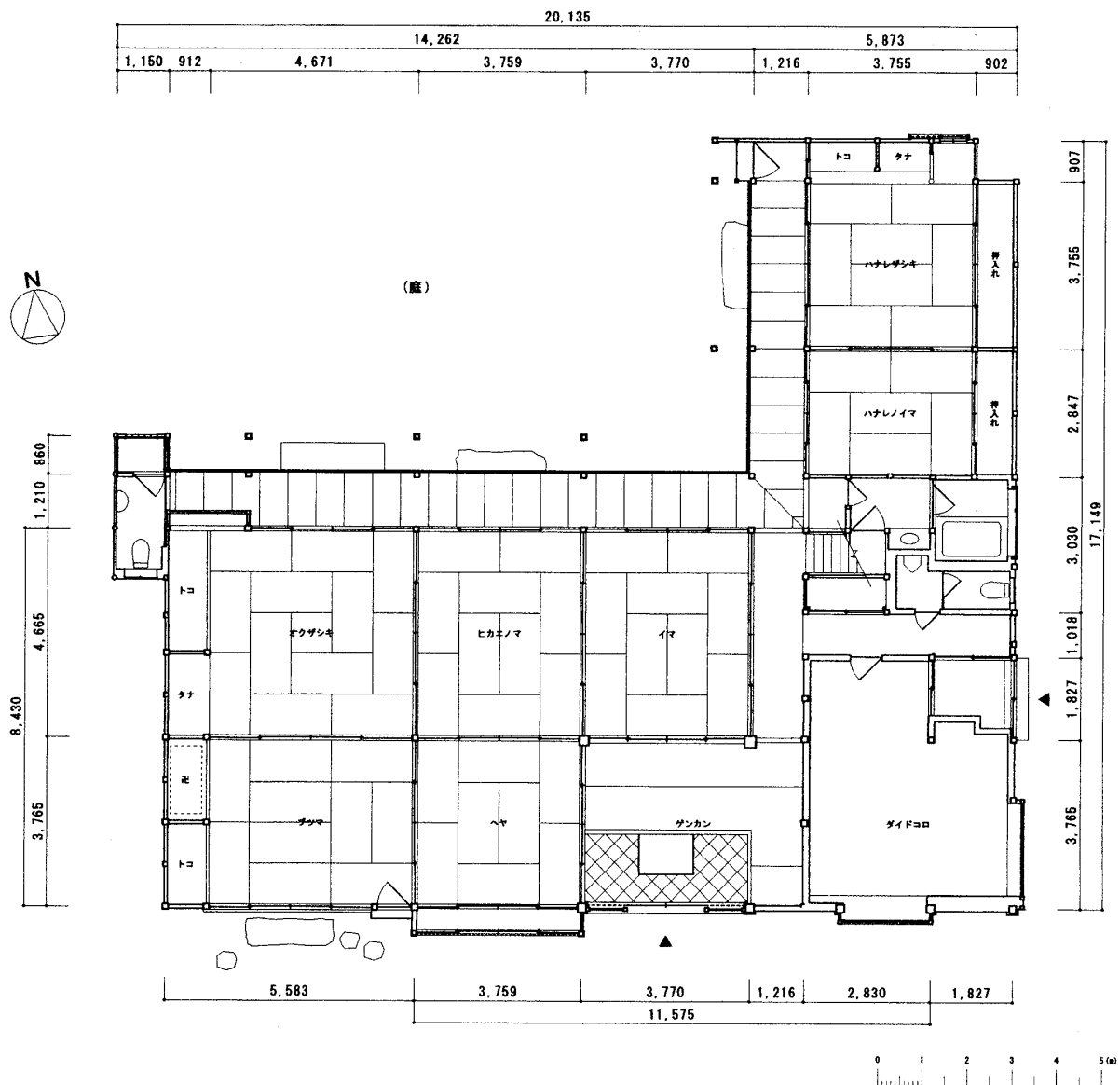


図2 幸道家住宅 一階平面図

二階は桁行6間4尺、梁間4間半で、主屋部全体に設けられた総二階建てである。3室が南北2列に並ぶ6室構成で、北側に半間幅の廊下がつく。東寄り北端の部屋は板の間(写真11)で、階段があり、残りの5室はいずれも畳敷、棹縁天井で、北側西端の8畳間にはトコとワキドコがある(写真12)。柱などは杉材とみられ、一階の諸部屋と比べると、材質や室内意匠はやや簡素である。



写真11 二階東より北端の部屋

なお、一階、二階ともに座敷部では6尺×3尺の畳寸法を考慮した畳割制が採られている。

(3) 構造(図3)

柱はいずれも礎石立てで、ゲンカンとイマ境は東側が8.3寸角、西側が6.8寸角の太い檜材で、二階までの通し柱になり、内法には成が1尺を超す檜の装束を入れ、天井は床梁をみせる力強い構法である。しかし、これ以外のオクザシキやブツマなどはいずれも4寸程度の檜の柱で、棹縁天井、薄鴨居、内法長押、彫刻欄間などがみられ、洗練された構法である。正面の下屋は腕木、二階軒も腕木形式であるが、垂木とともに塗籠められている。小屋組は未調査であるが、地域の他の例からみて当家も登梁工法を採っているものと思われる。

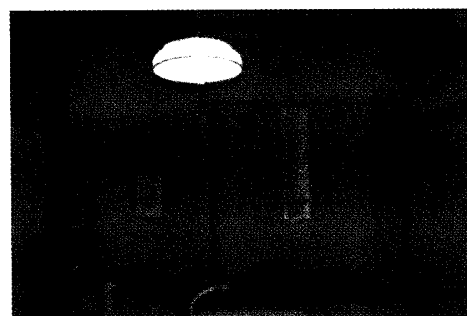


写真12 二階座敷

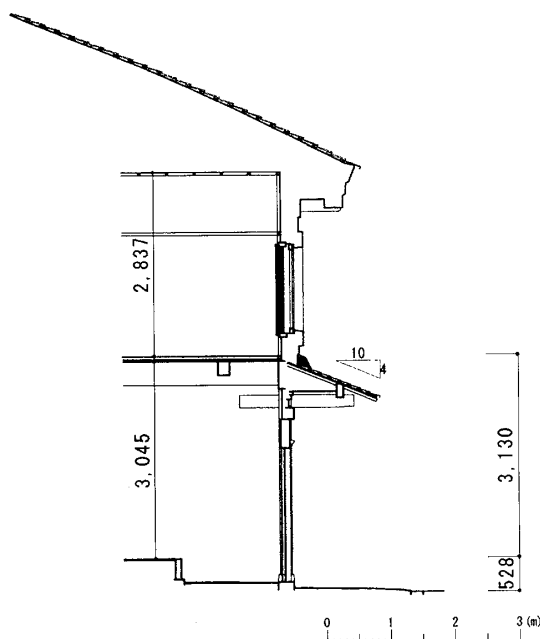


図3 断面図（正面側棒矩計）

5. 土蔵

主屋の西北よりにある土蔵は、3間×5間の切妻造、棧瓦葺きの木造二階建ての建築で、外壁は白漆喰壁で、軒裏は塗籠め、下方は下見板張とする（写真13）。通りに面する妻面の1階に土戸の出入り口、二階に鉄格子入りの窓を開け、銅板葺きの小庇をかけるが、その出桁を受ける力板、あるいは兎の毛通しは繊細な丸彫り彫刻がみられ、基礎石に開けられた通気口の網代風に施された彫刻も見事である。

内部（写真14）は、一、二階ともに白漆喰の真壁構造で、一階上方はまず桁行に大梁を通し、それに二階床梁を半間ごとに架け渡し、二階は桁行に地棟を通し、それに約4寸角の化粧垂木を架けている。現在の住宅を建設中、この土蔵を仮住まいとして使ったというから、土蔵の建築時期は現住宅より古いことになる。しかし、柱などの材の表情や小庇の力板など細部の彫刻の様子からみて、土蔵の建築時期は住宅のそれを大きく遡ることはないと思われる。



写真13 土蔵外観

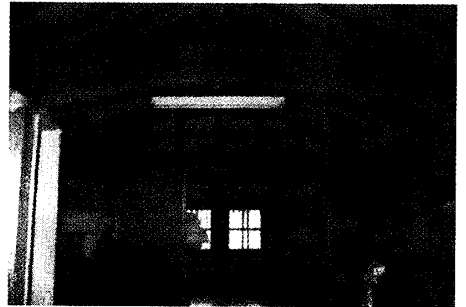


写真14 土蔵二階

6. 門と庭園

門は西側の瓦塀の中ほどに塀より約半間奥まって開く（写真15）。切妻造、棧瓦葺きの棟門形式で、以前は屋根面がもっと大きかったが、雪で破損したために切り縮めたという。



写真15 門



写真16 庭

この門の内に庭がある（写真16）。ほぼ中央に大きな小石敷きの池を穿ち、1枚石の長い石橋も架かっている。池の北側には築山があり、松や楓などの樹木が繁り、五重の石塔や燈籠などもみられる。建物と塀で周りを囲まれた小振りな庭であるが、よく整備され、建築とも調和している。この庭も主屋と同じ時期の作庭という。

7. まとめ

幸道家の住宅などの諸建物や庭などからなる屋敷構えは、繊維業を営んでいた最盛期の昭和10年から同12年に整備されたもので、現在も創建当初の状態をよく留め、住宅の質の高さや整った屋敷構えなどに当時の繁栄ぶりがうかがえる。鯖江市域に現存する昭和初期の上質な住宅建築として、また鯖江市域における町並み景観の観点からも貴重な町家建築の遺構である。

*本報告は、受託研究「鯖江市の歴史的建造物調査」（平成19年～21年）における平成19年度の成果の一部である。

（平成20年3月31日受理）